『労務者渡世』賞七六年度当選作（生活記録）

かげろうの如く

井上才五郎

私がT氏と出会ったのは、西成も町名変更の前、地下鉄動物園前から飛田本通商店街を入って右側のとあるドヤであった。

そのころN氏と仕事をしていた関係で、時々N氏のところへ仕事の連絡や遊びに行ったりしているうちに、同じドヤのT氏とも言葉をかわすようになり、つきあいが始まったのである。

N氏とT氏は大分前からの知り合いだったらしい。くわしくは聞かなかったが、加古川だか武庫川だかで同じ飯場にいたということだった。

T氏はそのころ、大正区にある材木店が出資している小規模な建築工事の仕事をしていた。私はN氏とK君と大体三人で、これも小規模な会社だったがトビ工事の方をやっていた。雨があったり手待ちがあったりで、私たちは暇をもてあましていることが多かった。

そんな時T氏が、賃金は安いけどよかったら手伝ってくれといって、二日三日と一緒に仕事をすることが多くなった。なるほど賃金は安かったが、遊んでいるよりはマシで、T氏の誘いを心待ちする日もあった。

間もなくT氏は材木店の裏に小さな小屋を借りて住みついた。それは材木店主や建築の方の責任者がT氏に好意を持って、家賃なしで貸してくれたので、早く金を残してアパートにでも入るように気使ってのことだった。

ところがT氏は一向にその気にならなかった。

付近に二、三軒ある酒屋でよく飲むのである。はじめのうちは現金だったが、なじみになるとツケで飲むようになって、毎月末にはそれを払うのに追われるようなことばかりして、それでも二年近くはその小屋に住んでいたと思う。

そのころ、私とK君とは住吉にあったネオン工事の会社へ行くようになっていた。

PR時代なので仕事はいそがしく、現場が二つ三つと重なってくる時などもあり、多数のトビ職が必要になると、どうしても馴れた者が各現場にわかれて、他は臨時につれてきた者を使うことになる。

当時もT氏と一緒に飲む機会のあった私はそのたびにT氏を私の仕事に誘った。それには?氏も乗気だったが、何しろ数年間も世話になった先だから、私たちのところへくるようになったのは、誘いはじめてから半年もしてだった。

そうなると例の小屋を出なくてはならない。東入船町にドヤをきめてせっせと動いた。働くのはよかったが前より収入がふえたから飲むのもはげしくなる。暇があると競輪はやる、夜になると酔っぱらって四五一をやる、好き勝手のやり放題になってきたのである。

その上二日酔いで仕事に出てきて危いことこの上もなしで、仲間からいつも注意されていた。

酒がきれている時は真面目に人のいうことを聞いているが、一度酒が入るともう耳をかそうともしない。自分一人でしゃべりまくって人に話などさせもしないといった風な調子である。その上早口でちょっとドモリである。三、四人で飲んでいても人の話に口をいれてきていつのまにか自分の話にしてしまう。対話なんていうものではなかった。ただT氏のおしゃべりを聞かされるだけで、はじめのうちは酒のサカナに聞いてやっていたが、何回か一緒に飲むと、もう人が相手をしなくなり、そろそろ勘定にしようかと元宇を打ってもしゃべりを封じるようになった。

といってT氏は、喧嘩をするわけでなし、人にイヤミをいうのでもない。はじめて相手をする人は気さくな好人物と思うのだった。そして又T氏は確彼の見さかいなく話をかける。以前一度でも一緒に仕事をしたとか、どこかの現場で顔を合せたことがあるとか、そんな人と十年来の友達のごとくに話し出す様子は実に堂に入ったもので、そんな人を相手にしゃべっては最後に結局勘定は自分が全部払って、静いがさめたら一円もなかったというようなことがしょっちゅうである。

さあそうなると今度は友人のところへ行くわけで、夜

中の一時だろうが二時だろうが意に介さない。今夜はダメだといっても人のいうことは聞いていないのだから、その早口のドモリでロレツのまわらない口で、どこで誰に会ってどうして飲んでおれが金を払って一円もなくなったから金を貸してくれ、今夜は金はないと返事をしてやると、しばらくは別の話をしているがまたどこで誰に会ってと話がはじめに戻って、一時間でも二時間でもべらべらクドクドやるわけである。明日仕事があるからおれは寝るから帰ってくれと、少々強引にでも追い出さないと一向に腰を上げないていたらくで、私たち仲間では困り者になってしまった。

それでいて翌朝、あれだけ飲んでいたから今日はとても仕事に出てこられまいと仲間うちで話していると、トコトコ出てくる。まだ酒のにおいをぷんぷんさせながら昨夜のことなんかどこ吹く風みたいなのである。

「Tやんそんな二日酔いで大丈夫か？」

というと、

「うん、なんとかいけるやろ」

と、のんきなものだ。

それではと一緒に会社へ行き、道具類を車に積んで現場へ着くころになるとぽつぽつ怪しくなってくる。

まず便所へ行ってくるという。そして私たちが仕事にかかりはじめると青い顔をして便所から帰ってくる。そして三〇分か一時間かはどうにか人並にやっているが、動作がのろくなったらもうダメである。

「心臓がおかしいからちょっと休む」

といって暑ければ陽蔭に、寒ければ暖いところへ行ってごろんとひっくり返る。ひるめしになると誰かが起してくれるので一緒に食堂へ行ってめしだけは食い、午後の作業にかかるとこれも三〇分か一時間で、今度は吐き気がするといってまた仕事は中止、三時の休憩まではそのままというのが普通で、下手すると夕方まで寝ていてあと片付になると出てくることもあった。

そんなことが三、四度あったので仲間の一人が、

「具合が悪かったら帰って寝たらー」

というと

「いやちょっと横になればすぐなおる」

と、途中から帰ることは絶対しない。

仲間の者たちは迷惑なものだ。

T氏を入れた作業の工程である。それを満足にやってくれないものだから、しわよせが仲間にかかってくるわけである。それでいて仕事を終って会社へ帰り賃金を受け取り（毎日払いの直行仕事だった）、近くの酒屋で一杯やるころにはすっかり元気で皆と同様に飲むのである。

厚顔無恥というか天真爛漫というか。

「Tやん、今日は一日寝て稼いだね」

と皮肉をいっても、本当にわからないのかわからないふりをしているのか馬耳東風である。しかし、そんなことでアンコ稼業がいつまでもつづくわけがない。

丁度そのころ、同じネオン工事のS社が作業員の助っ人を頼みにくることが多くなっていたので、そっちの方へT氏を廻すようにされてしまった。

S社に廻された最初、自分が責任を持たされたT氏は自重していたらしく、向うの社長に気に入られて常時行くようになり、しばらくは無事平穏にすごしたようだった。しかし時がたつにつれて、やはり地金が出てくるのはやむを得なかった。

ある時、S社が暇だったので、私たちの方へ応援に来てくれたのはよかったが、以前通りに二日酔いである。

仕事は小さな看板を普通の平屋の屋根に取り付けるだけの簡単なものだった。品物もそんなに重くない。ただ取り付け場所へ運ぶまでに障害物がいろいろあったため、運ぶにはかなり苦労した。

その日は何でもなく帰り、皆一緒にいつもの酒屋で軽んで別れ、翌日は雨で休みで次の日に出て行くとT氏が来ていて、

「どうも背中が痛くて呼吸困難なのや、一度医者に見てもらうわ」

という。

いつそんなになったか尋ねると、

「三日前のあの看板を上げるのに無理な体勢で持った時らしい」

とのことなので、T氏を残して私たちは仕事に行った。病院へは会社の事務員が付添って行くはずだった。

夕方会社へ帰ってみると、T氏の肋骨の二本とか三本とかにヒビが入っていて、三週間治療を要するとのこと。

そして医者は、あれだけヒビが入っていて二日も放っておけるものではないといったという。どうもおかしな話だが、またよく聞いてみようと私たちは連れ立ってT氏のドヤへ行った。

さすがに痛みで酒は飲めないらしく、シラフで寝ていた。

いろいろ尋ねたがあの作業の時以外、こんなことになる覚えがないといい張るから仕方がない。ではその通りなのだろうと皆が思いかけていたところへ、一度か二度顔を見たことのある男がひょっこり顔を出して、

「どうやTやん、ゆうべドツカレたり殴られたりやったが、なんともないか」

と、いきなりいうのであった。

私たちは唖然とした。

どうもおかしいと思った通りだった。

T氏は昨夜も例のように酔っぱらって、あまり知り合いでもない人たちがたのしみのバクチをやっている部屋へ入りこみ、いつもの調子でしゃべりまくったらしい。それでアタマにきた人たちにやられたのだそうだ。

なぜ本当のことをいわないんだと、私たちも腹をたて、もう面倒見切れない勝手にしろと部屋を出た。

そして面白くないから一杯飲みはじめたが、考えてみるとT氏も可哀想である。三週間も放っておくことはできない。

公傷にすれば少しは会社から金も出るが、私傷では金の出どころがない。それで彼も考えたわけである。はじめから事情を知らせてくれていたら皆もうまくクチウラを合せてやったものをと怒っても仕方がない、放って置こうにも会社だって心配していることだ、私たちは明日社長に相談してみようと話をきめて別れた。

翌日社長と話合った結果、社長は若いがものわかりよく、それも日に日に忙しくなっている仕事の順調さあってだろうが、とにかく公傷扱いにしてくれることに落ちついた。

その年はなんだかやけに忙しく、仕事用のトラックもふやせば社長の乗用車も新車になるなど、ネオン業者はどこも好景気だった。従って私たちまで景気がよかった。そして会社は急激に大きくなり、ネオン工事は副業のような電設会社になってしまった。

私たちの仕事は以前の通りだが、電気工事の方の役職の人たちが事務所にあふれるようになって、私たちは片隅に押しやられた気がしていた。そんな時に、ネオン関係の上得意を持っていた外交員二人が退社したりして、私たちはこの会社はいまにつぶれるぞとささやき合うようになった。

そんなささやきはシロウトのヤマカンにすぎなかったが、翌年今社は本当に倒産した。

やはり電気工事からの倒産で、ネオン関係だけならそんなことにならなかったろうと、これは話に聞いたことである。

倒産整理のため、車から工具まで全部なくなってしまい、私たちは別の仕事先を探すしかなかった。

そしてS社へ行くことにした。

好景気のなかでS社は手堅く伸びて、肋骨事件のあとまたS社へ戻っているT氏は、工事責任者のような立場になっていた。

こんどは位置逆転、私たちはT氏の指示で働くわけである。

どこで見つけてきたのか、T氏は当時あまり性質がいいとは思えない（これは私たちだけが思ったのでT氏はよく思っていたのだろうが）女をどこからか部屋につれてきて、AちゃんAちゃんとゴキゲンであった。そして仕事の方はもう天気など関係なく、毎日会社へ行って収入もかなりあったはずだ。

つきあいはじめた最初に私は知ってしまったが、誰にもいわずにきた癖がT氏にはあるのだった。

深酔いすると寝小便をやらかすのである。

ドヤのおばさんはあきらめムードで、畳替えもしてくれないので彼の部屋はいつ行っても妙な匂おいがした。

これは笑いごとではない。

彼によく聞いてみると、若い時、阪急電鉄の仕事をしていて、足をすべらして股間を強打し尿道切断になったことがあり、それ以来だという。今日であれば公傷後遺症だが、当時はそんな言葉も法規もなかったのであろう。それでいままで、どこへ行っても人に笑われ恥をかいてきたのである。そこを仕事でカバーしてきた努力は認めたいと思う。しかし誰にもそうであれとは望んでも無理で、ちょっとしたT氏の知り合いは「ああ、あの小便垂れか」という。私はずいぶん弁明してやったものだが、T氏の方も深酒をやめられない点が何としても悪い。そして必ずといっていい程、その晩にやってしまうわけである。

だから、会社も彼も景気がよく波女もできたで、四畳半押入付室内飲事という少し上等すぎる感じのアパートへ入って、テレビ、冷蔵庫など備え、Aちゃんが持ってきたというソファを二つも入れた部屋が、相変らず万年床に異臭を放っているのだった。

たまに部屋に行く私は、ソファなんか棄ててもっと片付けたらと忠告もしたがT氏は聞く耳持たずで、金のある限りは酒とバクチ、なくなると社長の自宅まで押しかけて前借りする始末、万博が丁度その頃で、私の仕事の方にもまた変化があった。

というのは、前に行っていた会社の倒産を見通したようにやめた外交員のことは既に書いたが、その人があたらしく自分でやはりネオン工事のG社を設立し、そっちへ行きはじめたことである。それで、S社の仕事をT氏の指示のもとにするということはなくなった。

きあいは続いていた。

T氏は心不全とかで医者へ行ったり、入院したりするようになった。入院でも健康保険はないから福祉の方からだったと思う。

最初は阪和病院で二ケ月もいたろうか。

私たちが見舞に行き、タバコ代にと何がしかの金を置いてくると、その二、三日後には新世界で飲んでいたなどの噂が誰からともなく耳に入ることがあった。次に見舞に行った時忠告はしてみたが聞き入れてくれそうもなく、そのうちとうとう強制退院させられた。

帰ってくれば仕方なく、無理にも仕事に出るが飲む方も酔う方も元へ戻ってしまう。救急車の世話にもなる。S社の社長に泣きつく。そんなくり返しになってしまった。

S社以外の他のところではもう通用しない仕事ぶりでもあった。

以前のように現場でちょっと横になる程度ではなく、朝のうちに仕事の内容を作業員に説明して一旦帰ってしまい、夕方社長が賃金を払いにくる頃になるとあらわれて、持ち前の口のうまさでさも終日働いていたようにつくろっては一人前の金をもらうようなことがしばしばだったらしい。しかしそんなことが長くできるわけにはなく、別に現場責任者をつけられて正味に一日働かねばならないようにされた。そうなると体が参ってしまうから楽な方へ楽な方へ廻りたがり、仕事はなんとかツジツマを合せて夕方金をもらうことばかり考えるようになる。社長もそれを見抜いて人を増やし、T氏はだんだん当てにされなくなった。

そうなると頼ってくるのは私たちで、しかし私たちもいつまでも甘い汁だけ吸わせておけない。T氏がちょっと体がエライから横になってなんていい出したら、即座にそれまで仕事した分だけの賃金を渡して帰ってもらうようになってしまった。そんなことからT氏は時々一緒に飲んだりするとG社は冷いとか仕事がエライとかいう。

すると前から知っている皆が、

「それはTやんお前の甘えというものや、今日このごろ、昔のあんたのやり方では通らんのや」

と、いままでのことを並べる。

不労収入というか、ちょっと横にの例がかぞえきれないほどあるのだった。そのなかには次のような笑い話もあった。

二、三年前の真夏。とても暑い日だったという。どこかの看板取り替え工事で飲料水に氷をバケツに入れ日蔭に置いて作業にかかった。そのうちT氏の体の調子が悪いようょっと横に――がはじまり、高所作業で怪我でもされてはと、責任者は日蔭で休んでおれといって残った者で作業を続けた。やがて昼めしの時刻になり、皆でバケツのところへきてみると、バケツはあるが中の氷がない。溶けてしまうには早すぎるのであたりを見ると、何とT氏が氷をタオルで包んで胸にのせて大イビキで眠っていた。その作業班が知り合いばかりならよかったのだが臨時に応援にきてくれた人もいたので、その連中が怒ってしまい、ついにT氏はなぐられたという。

この話は私も初耳だったが、そんなふうにT氏株は下る一方となり、話相手も少なくなって行った。万博景気が終って仕事が暇になりはじめた時期でもあった。

私も年令のことを考えるようになり、いつまでもトビの仕事はできないだろうし、またトビ職という仕事もだんだん少なくなってくるとも感じていた。

仲間と飲む時にも、

「いつまでもこんなことをしていてはダメだな。もうトシもトシだし、少々賃金は安くても、しっかりした会社に入っておかないと食えなくなるぞ」

と口癖のようにいいながら、ネオンの仕事がなければ鉄工所に行き、また糖尿トビにも行ってみたが、私はどこでも行けるがT氏K君たちは溶接の電気、ガスを使えないのでそうはいかない。

今月は四日働いただけだ、いや六日だといってなんとかシノイでいた。そこへオイルショックがきたからたまらない。ネオン関係の仕事は全然姿を消してしまった。それでも仕事をしなければ食えない。

ずっと以前の知り合いでカジ屋ばかりやっているO氏に頼みこんでT氏などと一緒に行ってはみたが、やはり電気、ガスが使えない、図面が読めないでは長続きしない。私も自分のことで精一杯だったのでいつとなく疎遠にありつつあった。しかし釣友だちでもあるK君とはいつも行き来していた。

K君はまだ若く、アンコにしておくのが勿体ないほど頭もいい。知識が広く、二人で飲んでいれば話が合ってたのしい。だからK君とは飲む機会が多く、そんな時にT氏はどうしているかと尋ねる程度になっていた。

「まあ、S社の仕事がたまにはあるらしいが大体は休んでいる」

とK君はいった。

その後C氏の世話で奈良県の山奥の窯業仕事に行くことになり、K君はもちろんとしてT氏も一緒にと頼んでみたが、C氏は以前に他の工事へT氏を連れて行って困ったことがあるというので、仕方なくC氏、K君、私と

ほか三人程で奈良県へ行った。

秋口に出かけ正月前ごろ帰ってきたので三ケ月ほど行ったことになるか、その間T氏は一ケ月ほど入院していたとあとで聞いた。

正月過ぎて私はいつも行く立ち飲み屋でよく顔を合わしてはいたがあまり話などしたことない人から、H造船へ行かないかと誘われた。日頃考えていたことでもあり渡りに舟とばかり話をきめ翌日から出勤しはじめ、その時、日雇労働保険（原文のまま）に入った。雇われた先はH造船の協力会社であり、週休二日制のため土曜日は休んで保険を安定所で受けるのでどうしても必要だった。

それからK君T氏などにも保険に入ることをすすめ、早く安定した会社へ行くように会えば必らずいってやった。

だが、どうしてもダメであった。

安定した会社へ行くと賃金が安いのだ。

アンコでもトビとなれば、H造船で私が三日働いてそれに毎日一時間の残業を加算した分ぐらい二日で軽く稼いでしまう。しかしあくまでもそれはうまく仕事にありついての話である。

毎朝、いい仕事はないかと当てもなしに寄場へ行くのも大へんなものである。あれば幸いだがまあ無い日が多い。あぶれの日が多くなるとフテ寝でもしているよりほかにない。そうなると保険も労働日数不足で資格なしである。

私がH造船に一年ほど通う間、K君T氏その他昔の仲間たちは、皆そんな生活がつづいていた。時々C氏が仕事を持ってきても、短期間だったりよその応援だったりして、前のように二ケ月三ケ月という長期の仕事は望めなかった。

私だけどうにかすごせていたが、昨年の秋結核になってしまい入院した。この時ほど保険に入っていてよかったと思ったことはない。療養所には保険の患者と更生相談所からきたいわゆる福祉の患者と一緒にいるが、毎月受けとる手当金の差は大へんである。私はのんびり療養生活を送っていた。

ある日、K君からハガキが届いた。

至って筆不精なK君がたよりをくれるとは珍らしいことだと目を通しておどろいた。もう一度読み返したが文面にはT氏の死亡が書いてある。それが七月二十日であった。

ハガキ一枚ではくわしいこともわからないので次の外出日にK君を訪ねた。

聞き出したところでは、K君も丁度病気中で一緒に行けなかったそうだが、T氏がC氏と千葉の方まで仕事に行ったのが七月十二日で、十三日の仕事始めの八時半頃、どれほどの高さかもわからない、とにかく墜落したとのこと。夕方まで呼吸はあったらしいが、折れた肋骨が肺に突き刺さりついに息を引きとったとのことだ。故郷から姉さんがきてくれて遺骨を抱いて帰ったという。

なんとも人の命のはかないものであろう。

つきあっている間、T氏の欠点ばかり見、また聞きもして暮してきたが、いざ死んでしまうと長所を探したくなるものである。そして、長い間友として遊び、飲食し、喜び、怒りしてきて、別れの一言もいえず、二度と言葉を交すことはもうないのである。

事故の一ケ月ぐらい前、私が外泊できたのでK君T氏と三人で釣り場へ行った時、仕事が思わしくないことなど話はしたけれど、話し足りなかったような気がしてならない。

幸い、といってよいのかわからないが、T氏の故郷と私の故郷はあまり遠くないので、もし帰郷したら必ず墓前へ線香、花一輪程度一本でも供えることを誓いながら、この世からかげらうのもく消え去ったT氏の冥福を祈るのみである。

なお、死亡の知らせを受けた時に作った歌を書き添える。

（一）

友ありし故郷の土となると聞く
花一輪供うるあたわず安らかにねむりくれと
のみ願う今の此の身は

（二）

友ありし事故死聞きても
仏前に行くすべもなく涙して病の癒えるまで
何故待たなむと今の此の身は

（三）

友ありしよく酒飲みて
口角に泡を飛ばして言い合いしことなど思い
つつ香のみに残す今の此の身は

（昭和五一年十月十一日）